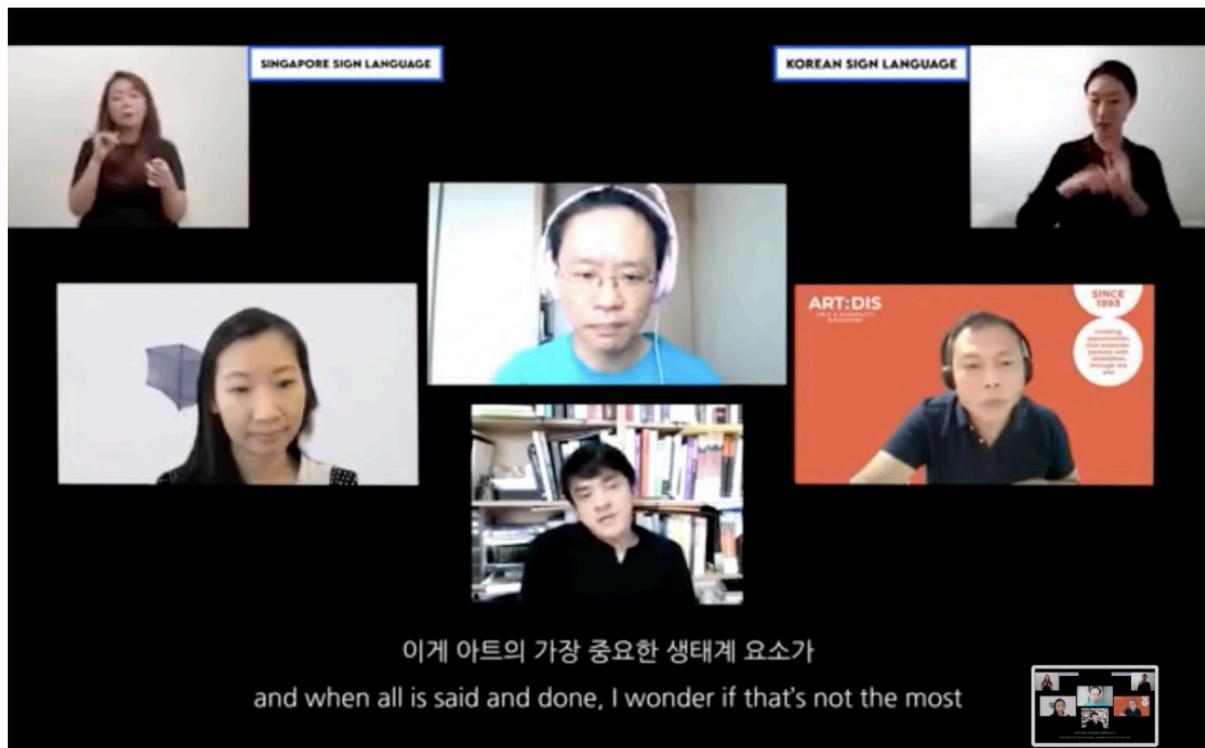


# 海外の障がいアートに対する認識と現状 リサーチ2025

韓国



[Disability Arts - Expanding Ecosystems, Protecting Foundations](#)

## 目次

1. [サマリー](#)
2. [背景](#)
3. [現状](#)
4. [今後の展望](#)
5. [参照記事一覧](#)
6. [アーティスト紹介](#)

# 1. サマリー

## 感じたこと

韓国は、政府の障がい者文化・アート団体連合設立以降、障がいを持つ人とアートの関係が強化されてきており、関連各種取り組みは、アートを通して障がい者と健常者が共になることを目標とし、障がいを持つ人と健常者のアーティストの境界が薄れてきているという。障がいを持つアーティストは、自身の障がい以外のテーマでアートを語るができるようになった。だが、それにより、彼らに特化したスペースや機会の重要性の弱まりに懸念を示す人びともみられる。また、障がいを持つアーティスト同士の対話を促すオンライン・プラットフォームの存在により、対話の当事者だけでなく、障がいの有無に依らず多くの視聴者に新たな刺激を与えているように思われた。

政府側と障がいを持つアーティストの両側から、障がいを持つ人/アーティストと健常者の隔てをなくす動きが活発であることがみられた

## 背景

### 文化的背景と差別の根源

- 儒教や仏教に由来する「正常・理想像」が障がい者に対する偏見を強化。
- 儒教の「身言書判」は身体・言語・文字能力を基準とし、障がいを持つ人を低く見なす構造。
- 仏教では障がいは「前世の業」と見なされることが多く、当事者に「恥」や「罪」の意識が向けられる。

### 工業化と排除のメカニズム

- 韓国の産業化過程において、効率重視の風潮が障がい者の「非効率性」と結びつき、労働市場からの排除を正当化。

## 現状

### 制度整備と現状の取り組み

- 1988年以降、多数の障がい者支援法が制定（利便性保証法、差別防止法、年金制度など）。
- 2006年に設立された障がい者文化・アート団体連合（Jang Ye Chong）が障がい者アーティストの支援を本格化。
- 代表プロジェクトに「a+festival」「special k」「国家文学賞」「アート展示会」など。

### 共生と包摂の実践例

- Seoul Art Space Jamsilでは、障がい者と健常者が共同で創作活動を行うワークショップや、個別支援プログラム「プロジェクトA」などを実施。
- Moduアート・シアターなど、障がい者中心設計の劇場で活動する事例が拡大。

#### プラットフォームの役割と課題意識

- Webzine leumなどのオンラインプラットフォームが情報共有・批評・対話の場を提供。
- “バリアフリー”ではなく、“障壁を認識し共に考える”という姿勢が強調されている。

#### 今後の展望

##### 社会的認知と未来への希望

- 障がい者がアートで評価され、自信や社会参加の契機となっている(例:ドラマ出演者Jung Eun-hyeなど)。
- アートによる表現は言語的コミュニケーションが難しい人にとって「声」となり得る。
- メディアや社会的企業(Testworks、Donggubat、Autistarなど)も障がい者の能力に光を当て、包摂型社会への道を切り開いている。

## 2. 背景



[Seoul Disability Arts Center](#)

韓国における障がいに対する差別の文化的文脈を理解する上で、考慮すべき重要な要素として、儒教と仏教における“普通/正常”であるとする強力な精神状態への言及が挙げられる。それらの考え方は障がいに対する考えに重大な影響を及ぼしているという。(儒教と仏教は韓国のみで信仰されているものではないため、それらの影響は他の国でも存在し得るだろう)

- 儒教: 原則である身言書判は、人格者(君子)とされる者は、身体的健康・コミュニケーション能力・識字能力・判断力を有していなければならないとした。これは、障がいを持つ人びとはそれらの基準を満たさないため、儒教思想では、低い社会的地位に位置することを暗に示している。
- 仏教: 一派的に障がいは業(カルマ)によるものだと解釈され、前世で犯した罪の結果であるとされる。アジア地域内での比較調査を実施した台湾の国立陽明交通大学の教授Yueh-Ching Chouは、人びとが未だに障がいをそのように理解していることを発見した。インタビュー回答者の中には、障がいを“前世/現世での積み重なった過ちに起因する、自ら獲得しに行った悲劇である”と描写する人もいた。

「それらの見方や東アジア文化における社会的地位と“体面を守る”ことの重要性が長きにわたり障がいを持つ人びとに恥と失望の念を抱かせるのを助長しているのだ。それらの感情は彼らの家族にまで及び、その多くが障がいを持つ親族に隠れたりキャリアの追求をやめるよう強制した。また、それらの要素は、社会が障がいを個人で対処すべき個人的な問題であるとみなすのに寄与してしまっており、社会の外の隔離された機関で管理・対応・指導するものであるとされていた」という。

韓国社会の障がいに対する差別的対応の改善を妨げる重要な要素の一つとして韓国の工業化の発展も挙げられるという

- 企業の効率性と大量生産を重視する姿勢は、障がいを持つ人びとが非効率的で業務に不適當であり、従って労働市場から彼らを排除された存在である、という認識を生み出している。
- 同様の状況はイギリスやアメリカ等、他国の工業化初期段階で確認されており、同じ事態を生んでいる: 健常者より劣る労働/福利厚生条件・スティグマの強化・孤立。

### 3. 現状



[Republic of Korea: Breaking barriers, one brushstroke at a time](#)

#### 韓国における障がいに対する全体的な変化

1988年のソウル・オリンピック以後、韓国政府は障壁を持つ人びとに関する啓発と状況改善のために様々な取り組みを実施した。その例には、1997年の障がい者の利便性保証法・2001年の障がい者雇用促進および職業リハビリテーション法・2007年の障がい者差別防止および賠償請求権法・2010年の障がい年金法等の法整備も含まれる。(ただし、その効果は不十分)

#### 障がいとアートに関する状況

- 韓国障がい者文化・アート団体連合(以下、**jang ye chong**)

2006年発足した同団体は、障がいを持つアーティストを、彼らにしか生み出せないアートの価値の創出主体にさせ、その価値を広げていくことを支援する。また、障がいを持つ人びとがアート活動を職業として続けることに対する支援も目的とし、最終的に彼らの雇用や自立した生活を促そうとしている; 文化を享受する権利を保証することで、障がいを持つ人びとの社会参加・生活の質の向上・アートを通じた幸福の追求支えようとしているのだ。そのため、同団体、障がいを持つアーティストの育成と創作活動のためのスペースの整備による、文化/アートフェスティバル・障がいを持つアーティストの国際的な交流プログラム・障がい者アートに対する社会意識向上のための啓発活動・関連法律/制度改善のための政策調査プロジェクト等、多様なプロジェクトを促進している。それらの代表的プロジェクトに、障がい者のための文化/アートフェスティバル”a+festival”・障がい者のための文化/アートのコンテストである’special k’・障がい者を対象とした国家文学賞・障がい者アートの展示会が挙げられる。’a+festival’は、2009年に始まった文化/アートフェスティバルであり、「障がいを持つ人の能力・利用可能性・活動」をモットーに掲げ、アートを通して障がい者と健常者皆共になることを目指している。同プロジェクトは障がいを持つ人が消

極的な見学者ではなく、アートの創造活動の主体としての参加を支援している。‘special k’は、障がいを持つアーティストの文化/アートのコンテストであり、彼らの積極的なアート活動に対する社会的・芸術的に重要な意味を持つものである。そのコンテストの対象区分には、伝統的音楽・創作音楽・クラシック音楽・ダンス・演劇/ミュージカルが含まれる。‘障がい者を対象とした国家文学賞と障がい者アートの展示会’は、傑出した作品の選出と賞の授与を行う。文学賞は、詩と散文の2区分で構成される。一方展示会は、韓国画・西洋画・工芸・彫刻・カリグラフィ・文学作品に基づく絵画・版画・装飾的カリグラフィで構成されている。同団体の活動の結果として、芸術界関係者による障がい者アートの発展に向けた計画策定・資金調達・認知度向上に関する議論の実施・アーティストのために‘情緒的支援の学芸員’という、新しい職業の創出・障がいを持つアーティストが利用する展示施設等の施設が障がい者にとって利用しやすい設計であるか設計であるかの調査・アート・文化を通じた障がい者と健常者の交流・融合に関するオンライン・問議会の開催が実現している。

- ソウル・アート・スペース・Jamsil

2007年、韓国初の障がいを持つ視覚芸術のアーティストのための創作スタジオとして開設された。その主要活動として以下のものがある: 障がい者と健常者のためのプロジェクト“私たちはつながっている”(障がい者と健常者が文化・アートを通じて、協調の中で共存できる環境の創出を目指し、両者が障がいから生じる”差異”による差別を恐れることなく共存できる社会の構築に向けて取り組む公共プロジェクト)・文化・アートに関する公開討議(障がい者と健常者が参加し、対話が行われ、障がいを持つアーティストの創作活動や彼らの作品を楽しむ機会の創出/様々な立場からの幅広い事柄に関する声や意見を考慮した、障がいを持つアーティストの作品の価値の熟考・障がいを持つアーティストの作品を支援するネットワーク機能の発揮がされている)・居住アーティスト支援プログラム“おはようスタジオ”(毎年そこで暮らす12人のアーティストの募集と選出が行われ、居住アーティストには専用の仕事場を提供する)・専門家マッチングプログラム(アーティストの作品の批評し、芸術的な成長を助ける)・創作的ワークショップ・障がい者と健常者アーティストのための共同創造ワークショップ(障がい者・健常者アーティストが協力するプロジェクトであり、ソウル芸術・文化財団が運営する4つの創作活動スペースで前・現居住アーティストの試験的共同創造が実施され、創造性と共感の概念の拡大による文化的多様性の促進を図る)・“プロジェクトA”(障がいを持ち、芸術的才能・可能性を持つ子どもに対する個別指導プログラムであり、包摂的アートの可能性を広げ、様々な特別展示会の機会に関する一般の人びとの賛同を拡大させている)・障がいを持つアーティストの創作活動活性化支援プロジェクト(ソウル市内の障がいを持つアーティストの創作活動と発表を支援することで障がいを持つアーティストにとって安定した芸術的共存環境の創出を図る)。

- オンライン・プラットフォーム“Webzine leum”

公的資金で運営されており、障がいを持つアーティストは自身の作品を紹介・批評の交換・バリアフリーなプロジェクトに関する情報共有・国内外での障がい者アートに関する対話の情報共有が行える。作品に対する批評は専門家だけではなく、障がいを持つ観客として参加するメンバーからも寄せられる。同プラットフォームを含む障がいを持つアーティストの機関は時に主流な批判派から、脅されることもあるという。それでも、障がい者アートのプロジェクトに様々な多角的な重要な関与がされることで、“Webzine leum”は障がい者アート批評を単なるアートの一領域に対する批評から障がいを持つアーティストの言葉を集め、アーティストと観客のつながりを強化する働きを担うものへと進化させたにだ。障がい者アートは多種多様な協力を

必要とするため、創作活動の現場だけでなく、芸術界や具体的な協力が実現できるスペースも鍵となり、情報のプラットフォームがそれらの解決に最も重要な役割を果たすのだ。また、それらプラットフォームの役割が批評収集だけではなく、各過程に対する承認と評価の提示も担っている: 障がいを持つアーティストと彼らの協力者が考える懸念事項は何かについて・披露する場所の確保の困難さについて・異なる言語での意思疎通の問題について・採用した過程に実際的に適する作品とは何かについて。これら全ての問いを一斉に浮上させることは、プラットフォームで重要な物事/動きの一つである。つまり、同プラットフォームは情報・批評の提供を担うだけではない; アーティストに他のアーティストの存在を認識させ、つながりを持つよう支えるとともに彼らの多くに刺激・発想を与えている。

## 4. 今後の展望



[ANNIVERSARY How disabled artists in Korea are shattering stereotypes, inspiring changes](#)

障がい者や社会にとって障がい者の創作活動が有益なものである、という意見が示されていた

- "発達障がいを持つ人々は言葉によるコミュニケーションに困難を抱えることがあります。私は彼らが他の人々とつながることを強く願っていると思っています。私の娘は絵画を声として使い、自身を世界とつなげています。彼女のアートに強い肯定的な反応を示す人々を見て、私の娘は認められたと認識し、ついに自身に対して肯定的になれたようにみえます"(カリカチュア作家Jang Chaの母)
- "アート創作活動で、私たちは他の人に評価される何かをすることが出来ることに気づいたのです。壇上で演じ、他の人が私たちの声を傾聴しているのを見て、私の自身の生活や生き方に大きな価値を感じ、目的に対する強い意識を感じました"(劇団俳優Lee)
- "障がいを持つ人にアートを通じた物語の共有を求め、彼らの物語は公衆と共鳴し、広がりを見せていることは、私たちが成熟した包摂的な社会へと向かっていることを示しています。あまりに長い間、障がいを持つ人へのメッセージはただ'どうにかやり抜けろ'と自身の幸福を保つこと、というものでし

た。今は、彼らに経験と意見の共有を求めるようになり、これは社会改革の強力な力になり得ます”(Moduアート・シアターの総支配人Oh Se-hyeong)

今回参照したすべての記事から伝わってくるメッセージは、「障がい者(障がいを持つアーティスト)と健常者(健常者のアーティスト)の隔てがなくなることを望む、という意見が主流でありつつも、それに対する懸念もある」であった

- “アートの領域において障がいといったものは存在しません” “私たちはしばしば障がいを持つ人々は慈悲の受ける人々で、自身が慈悲を与える側であると考えがちです”と、彼女は説明した。“実際には、この考えによって人々が分けられ、分かち合うことをなくしています。私はこの展覧会がその誤った考え方を打破する機会になるように企画しました”(Vichae美術館のディレクターSoomi Jeon)
- “人々は、障がいを持つアーティストの展示会は単なる無料イベントだと考えていますが、誇りあるアーティストである彼らは、汗と情熱を費やして、自身の創造力を私たちに与えてくれています。ですので、彼らの作品を見るのに料金を払い、商業的展示会として開催することが、実際には正しいことなのです” “そうして彼らはいつか経済的自立を果たすのです”(Vichae美術館のディレクターSoomi Jeon)
- 様々なプラットフォームが障がいを持つアーティストの作品を様々な分野につなげる、新たな方法を提供しており、それに関連したプロジェクトが着実に勢いを得てきていることで、障がいを持つ人と健常者のアーティストの境界が見えにくくなっている。障がいを持つアーティストは、自身の障がいという文脈の外でアートについて話すようになり、他の少数派に属するアーティストは、障がいを持つアーティストが長い間考察した“異なっている身体”という概念を、壇上で扱うようになった。しかし同時に、アーティストがより自由に境界を、この“異なっている身体”という橋を渡って行き来するようになったことで、障がいを持つアーティストが長年集めてきた独自の創造的スキルと知識の大部分が障がい者アートの外側の縁に追い込まれないように注意しなくてはならない。韓国で、障がいを持つアーティストの創造的プロジェクトは、通常、劇場運営企業等、創造的企業や団体の視点で反映される。それらは障がいを持つアーティストが仲間の障がいを持つアーティストとの交流・障がいを持つアーティストとしてのアイデンティティ形成・独自のスキルの収集を行えるスペースである。障がいを持つアーティストに特化したスペースや機会の重要性があまり強調されなくなることは、障がい者アートが持つ境界が失われつつある中での副作用である。
- 障がいを持つ俳優だけで構成された韓国の劇場運営企業の一つAeenは、障がいを持つアーティストの身体的状況に適した、特別な演技的・創作的な手段に関する議論を設けた。そこでは、複数の障がいを持つ俳優が”健常者の俳優と共演した際に自身に対する不十分感を感じた”と共有し、特に健常者の身体に合わせ作成された演技手段と訓練方法に足並みを揃えることに困難さを感じていた。



## 5. 参照記事一覧



[Seoul Disability Arts Center](#)

- [ANNIVERSARY How disabled artists in Korea are shattering stereotypes, inspiring changes](#)
- [Republic of Korea: Breaking barriers, one brushstroke at a time](#)
- [Support for the activities of the disability arts association by region and genre](#)
- [Republic of Korea](#)
- [Disability Arts - Expanding Ecosystems, Protecting Foundations](#)
- [Changing Our Minds About Developmental Disabilities in South Korea](#)
- [Seoul Disability Arts Center](#)

## 6. アーティスト紹介

- [Jung Eun-hye](#)
- [Alecia Neo](#)